

一席話

泉鏡太郎

青空文庫

かづきのくにかうづけぐん
 上總國 上野郡に田地二十石ばかりを耕す、源五右衛と云
 ひやくしやう
 ふ百 姓の次男で、小助と云ふのがあつた。兄の元太郎は至
 ごくじつてい
 極實體で、農業に出精し、兩親へ孝行を盡し、貧
 なか
 しい中にもよく齊眉き、人づきあひは義理堅くて、村の譽ものな
 その
 のであるが、其の次男の小助は生れついたのらくらもの。晝間は
 なや なか
 納屋の中、鎮守の森、日蔭ばかりをうろつく奴、夜遊びは申す
 いろ しろ
 までもなし。色が白いのを大事がつて、田圃を通るにも編笠で
 や
 しよなりと遣る。炎天の田の草取などは思ひも寄らない。
 りやうしん
 兩親や兄の意見などは、蘆を吹く風ほども身に染みないで、
 ほうばいどうし
 朋輩同士には、何事にも、直きに其の、己が己ががついて
 なにごと
 まは

つて、あゝ、世が世ならばな、と口癖のやうに云ふ。尤も先祖は武家出であらうが、如何にも件の、世が世ならばが、友だちのみにさは耳に觸つて聞苦しい。自然につきあつて遊ぶものも少なくなる。對手もなければ小遣もなく、まさか小盗賊をするほどに、當人氣位が高いから身を棄てられず。内にのらくとして居れば、兩親は固より、如何に人が好いわ、と云つて兄じや人の手前、据膳を突出して、小楊枝で奥齒の加穀飯をせゝつては居られぬ處から、色ツぼく胸を壓へて、こゝがなどと痛がつて、溜息つく／＼と鬱いだ顔色。

これが、丸持の祕藏子だと、匙庵老が脈を取つて、氣鬱の症でござす、些とお氣晴を、と來て、直ぐに野幫間と變化る奴。

父親合點の母親承知で、向島へ花見の歸りが夜櫻
 見物と成つて、おいらんが、初會惚れ、と云ふ寸法に成る
 のであるが、耕地二十石の百姓の次男では然うは行かない。
 新田の太郎兵衛がうまい言を言つた。小助が鬱ぐなら蚯蚓を
 煎じて飲ませろと。何が、藥だと勧めるものも、やれ赤蛙が
 可い事の、蚯蚓が利く事の、生姜入れずの煎法で。小判處か、
 一分一ツ貸してくれる相談がない處から、むツとふくれた頬
 邊が、くしゃくしゃと潰れると、納戸へ入つてドタリと成る。所
 謂フテ寢と云ふのである。
 が、親の慈悲は廣大で、ソレ枕に就いて寢たと成ると、日
 が出りや起る、と棄てては置かぬ。

そば 傍そばにつ着ついて居ゐて居ゐて 看かん病びやうするにも、遊あそぶ手てはない 百ひやく姓しやうの忙いそが
 しき。一人ひとり放はなり出だして置おいた處ところで、留る守すに山やまから猿さるが來きて、沸にえ湯ゆ
 の行ぎやう水ずゐを使つかはせる憂きづ慮かひは決けつしてないのに、誰たれかついて居ゐら
 ねばと云いふ情なさけから、家うち中ぢゆう野の良らへ出でる處ところを、嫁よめを一人ひとりあとへ殘のこし
 て、越あつ中ちゆうの藥くすり賣うりが袋ふくろに入いれて置おいて行ゆく、藥くすりながら、其その
 優やさしい手てから飲のませるやうに計はからつたのである。
 嫁よめはお艶つやと云いつて、同どう國こく一いちノ宮みやの百ひやく姓しやう喜き兵へい衛ゑいの娘むすめで、兄あに
 もとたらう 元もと太た郎らうの此これが女によう房ぼう。束たばね髪がみで、かぶつては居ゐるけれども、
 いろじろ 色いろ白しろで眉きりやう容うの美うつくしいだけに身からだ體だが弱よわい。ともに身からだ體だを休やすまし
 て些ちと樂らくをさせようと云いふ、其それにも舅しゆうたちの情なさけはあつた。しかし
 箔はくのついた次じ男なんどのには、飛とんだ蝶てふく々く、菜なた種ねのはなを見み通とほしの春はる

ころ心、納戸で爪を磨がずに居ようか。

尤も其までに、小當りに當ることは、板屋を走る團栗に異

ならずで、蜘蛛の巢の如く袖褻を引いて居たのを、柳に風と受

けつ流しつ、擦抜ける身も瘦せて居た處、義理ある弟、内氣の女。

あけては夫にも告げられねば、病氣の介抱を斷ると云ふわけ

に行かないので、あいくと、内に残る事に成つたのは、俎のな

い人身御供も同じ事で。

疊のへりも蛇か、とばかり、我家の内もおどくしながら二日

は無事に過ぎた、と云ふ。三日目の午過ぎ、やれ粥を煮ろの、お

かうくを細くはやせの、と云ふ病人が、何故か一倍氣分

が悪いと、午飯も食べないから、尚ほ打棄つては置かれぬ。

くすりせん 薬を煎じて、盆は元げたが、手は白い。お艶が、納戸へ持つて行く、と蒲團に寝て居ながら手を出した。

「姉さん、何の所爲で私が煩つて居ると思つて下さる、生命が續かぬ、餘りと言へば情ない。人殺し。」

と唸つて、矢庭に抱込むのを、引離す。むつくり起直る。

「あれえ。」

と逃げる、裾を掴んで、ぐいと引かれて、身を庇ふ氣でばつたり倒れる。

「さあ、斷念めろ、聲を立てるな、人が來て見りや實は何うでも、蟲のついた花の枝だ。」

と云ふ處へ、千種はぎくの股引で、ひよいと歸つて來たの

は兄あにじや人ひと、元太郎もとたろうで。これを見みると是非ぜひも言いはず、黙だまつてフイと消失きえうせるが如ごとく出でて了しまつた。

お艶つやは死しにものぐるひな、小助こすけを突飛つぎとばしたなり、茶ちやの間まへ逃にげた。が、壁かべの隅すみへばつたり倒たふれたまゝ突臥つつぶして、何なにを云いつてもたゞさめ／＼と泣なくのである。

家うちぢう中ちゆうなめた男をとこでも、村むらがある。世間せけんがある。兄あにじやに見み着つかつた上うへからは安穩あんのんに村むらには居をられぬ、と思おもふと、寺てらの和尙をしやうまで一いつしよ所に成なつて、今いまにも兩親りやうしんをはじめとして、ドヤ／＼押お寄しよせて來きさうに思おもはれ、さすがに小助こすけは慌あわたしく、二三枚にさんまい着きものを始しまつ末まつして、風呂敷ふろしきづつ包こしらみを拵こしらへると、直すぐに我家わがやを駈かけ出ださうとして、行ゆきがけの駄賃だちんに、何なんと、姿すがたも心こゝろも消きえ々／＼と成なつて泣ないて居あ

るお艶つやの帯おびを最もう一度いちどぐい、と引ひいた。

「ひい。」

と泣なく脊筋せすぢのあたりを、土足どそくにかけて、ドンと踏ふむと、ハツと悶もだえて上あげた顔かほへ、

「ペツ、澁しぶと太あまい阿魔あまだ。」

としたゝかに痰たんをはいて、せゝら笑わらつて、
 「身體からだはきれいでも面つらは汚よごれた、様さまあ見みろ。おかげで草鞋わらぢを穿はかせやがる。」

と、跣足はだしでふいと出でたのである。

たとひ膚身はだみは汚けがさずとも、夫をととの目めに觸ふれた、と云いひ、恥はづかしいのと、口惜くやしいのと、淺あさましいので、かツと一途いちづに取逆とり上のぼせて、お艶つや

は其そのの日ひ、兩りやう親うしんたち、夫をのつとまだ歸かへらぬ内うちに、扱しご帯きにさがつて、袖そではしぼんだ。あはれ、兄あにの元もと太郎たらうは、何なに事ごとも見みぬ振ふりで濟すます氣きで、何いつ時ともより却かへつて遅おそくまで野の良らへ出でて歸かへらないで居ゐたと言いふのに。

却さて説こすけ小助は、家いへを出でた其その足あしで、同おなじ村むらの山手やまてへ行いつた。こゝに九兵衛くへゑと云いふもの娘むすめにお秋あきと云いふ、其その年とし十七じゅうしちになる野上のがみい一郡ちぐん評判ひやうばんの容色きりやうよ佳よし。

男をとこは女をんな蕩うはらしの浮氣うはきもの、近ちか頃ごろは嫂あによめの年増としまぶ振りに目めを着つけて、多しば日らく遠とほ々／＼しくなつて居ゐたが、最もう一二年いちにねん、深ふかく馴なじ染じんで居ゐたのであつた。

此この娘こから、路銀ろぎんの算段さんだんをする料簡れうけん。で、呼出よびだしを掛かける

氣きの、勝手かつては知しつた裏口うらぐちへ、つて、垣根かきねから覗のぞくと、長閑のどかな日ひ
 の障子しやうじを開あけて、背戸せどにひらくと、蝶々てふくの飛ぶとのを見みながら、
 壁かべは黒くろい陰氣いんきな納戸なんどに、恍惚うつとりとものおも思おもはしげな顔かほをして手てをな
 よくと忘わすれたやうに、静しづかに、絲車いとぐるまを、まはして居ゐました。眞まっし
 白しろな腕うでについて、綿わたがスーツと伸のびると、可愛かほい掌てのひらでハツと投な
 げたやうに絲卷いとまきにするくと白しろく絡まつはる、娘むすめ、心こころは縁えにの色いろを、
 其その蝶てふの羽はに染そめたさう。咳せきをすると、熟じつと視みるのを、もぢやノ
 指ゆびを動うごかして招まねくと、飛立とびたつやうに膝ひざを立てたが、綿わたを密そつと
 下したに置おいて、立構たちがまへで四邊あたりを見みたのは、母親は、おやが内うちだと見みえる。
 首尾しゆびは、しかし悪わるくはなかつたか、直すぐにいそくと出でて來く
 のを、垣根かきねにじりくと待まちつけると、顔かほを視みて、黙だまつて、怨うらめ

しい目をしたのは、日頃の遠々しさを、言はぬが言ふに彌増ると云ふ娘氣の優しい處。

「おい、早速だがね、此の通りだ。」

と、眞中を結へた包を見せる、と旅と知つて早や顔色の變る氣の弱いのを、奴は附目で、

「何もいざござはない、話は歸つて來てゆつくりするが、此から直ぐに筑波山へ參詣だ。友達の附合でな、退引ならないで出掛けるんだが、お秋さん、お前を呼出したのは他の事ぢやない、路用の處だ。何分男づくであつて見れば、差當り懷中都合が悪いから、日を延ばしてくれとも言へなからうではないか。然うかと云つて、別に都合はつかないんだから、此の通

り支度したくだけ急いそいでして、お前まへを當あてにからつぽの財布さいふで出でて來きた。
 何どうにか、お前まへ、是非ぜひ算段さんだんをしてくんねえ。でねえと、身動みうごき
 はつかないんだよ。」

お秋あきは何なにも彼かも一いつ時ときの、女氣をんなぎに最もう涙なみだぐんで、

「だつて、私わたしには。」

と皆みなまで言いはせず、苦にがい顔かほして、

「承知しょうちだよ、承知しょうちだよ。お鳥てうもく目めがねえとか、小遣こづかひは持もた

ねえとか云いふんだらう。働はたらきのねえ奴やつは極きまつて居ゐら、と憚かう云いつて

は濟すまないのさ。其處そこはお秋あきさんだ。何時いつもたしなみの可いいお前まへ

だから、心得こころえておいでなさらあ、ね、其處そこはお秋あきさんだ。」

「あんな事ことを云いつて、お前まへさん又またおだましましたよ。筑波つくばへお詣まゐりぢ

やありますまい。博奕ばくちの元手もとでか、然さうでなければ、瓜井戸うりんどの誰だれさ
 んか、意氣いきな女郎ぢやうらうしう衆しうの顔かほを見みにおいでなんだよ。」「
 黙だまつて聞ききねえ、厭味いやみも可いい加減かげんに云いつて置おけ。此方こつちは其處そこど
 ころぢやねえ、男をとこが立たつか立たたないかと云いふ羽目はめなんだぜ。友ともだ
 達ちへ顔かほが潰つぶれては、最もう此この村むらには居ゐられねえから、當分たうぶん此
 がお別わかれに成ならうも知しれねえ。隨分ずぶん達たつしや者やで居ゐてくんねえよ。」「
 と緊しつかり乎てと手てを取とる、と急きふに様やう子すが變かはつて、目めをしめばたゝいた
 のが、田舎あなの娘むすめには、十じふ分ぶん愁めいが利きいたから、惚ほ抜ぬいて居ゐる男をとこの
 事こと、お秋あきは出で來きぬ中うちにも考しあんして、
 「小助こすけさん、濟すみませんが、其それだけ私わたしお鳥てうもく目もは持もちません。
 何なにか品しなもので間まに合あはせておくんなさいまし。其それだと何どうにかし

ますから。」

「……可いとも、代もの結構だ。お前、眞個にお庇さまで男が立つぜ。」

と、そやし立てた。成たけ人の目に立たないやうに、と男を樹の蔭に、しばしとて、お秋が又前後を見ながら内へ入つたから、しめたと、北叟笑をして待つと、しばらく隙が取れて、やがて駈出して来て、手に渡したのが手織木綿の綿入一枚。よくノであつたと見えて、恥しさうに差俯向く。

其の横顔を憎々しい目で覗込んで、

「何だ、これは、品ものと云つたのは、お前此の事か。お前此の事か。品ものと云つたのは、間に合はせると云ふのは此かな、え、

お秋あきさん。「

娘むすめはおどくして、

「母かあさんが内うちだから、最もう其その外ほかには仕しやうがないもの、私わたし。」

「此これぢや何どうにも仕し様がねえ。とでも出で来きねえものなら仕しかた方はね

えが、最もう些ちつと、これんばかりでも都つがふ合あをしねえ、急きふ場ばだから、

己おれの生いき死しの境さかひと云いふのだ。」

最もう此この上うへは、とお秋あきは男をとこのせり詰つめた劍けん幕まくと、働はたらきのない

女をんなだと愛あい想そを盡つかさされようと思おもふ憂きづ慮かひから、前ぜん後ごの辨わ別まへもな

く、着きて居ゐた棒ぼう縞しまの袷あはせぬで貸かすつもりで、樹きの蔭かげではあつ

たが、垣かきの外そとで、帯おびも下くだメ《したじめ》もするくと解ほどいたので

ある。

先刻さつぎから、出入りではひのお秋あきの素振そぶりに、目めを着つけた、爐邊ろべりに煮にもの
 をして居ゐた母親はやおやが、戸外おもてに手間てまが取とれるのに、フト心こゝろ着づいて、
 「秋あきは、あの子こや。」

と聲こゑを掛かけて呼よぶと、思おもふと、最もうすたくと草履ざうりで出でた。

「あれ、其それは、」

と云いふ、帶おびまで引手ひつたく奪あはせつて、裕いっしょも一いっしょ所に、ぐるくと引丸ひんまる
 げる。

「秋あきやあ。」

「あゝい。」

と震ふる聲へごゑで、慌あわてて、むつちりした乳ちの下したへ、扱帶しごきを取とつて
 巻まきつけながら、身からだ體だごとくるくと顛倒てんだうして、處まはへ、づか

で、は、おやと出た母親は驚いて、まっぴるま白晝のあかねもめん茜木綿、それもひざ膝からうへ上げ
 かり。

「此の狐憑きつねつきが。」

とかつ赫と成ると、をどりあが躍上つて、くろかみ黒髪をひつつか引搦むと、ゆき雪なすはだ膚
どろを泥の上へひきたふ引倒して、うちずるくと内へひきこ引込む。

「きい。」

と泣くのが、からだ身體がえんがは縁側へはし橋にそ反つて、そ其のまゝなんど納戸のいとぐ糸
るま車の上へ、まわた眞綿をひしや挫いだやうにねぢたふ捻倒されたのを、まつばら松原から
のびあがのびあがつて、なばたけごし菜畠越に、とほ遠くでみ見て、した舌を吐いて、かすみ霞がくれの
はなうた鼻唄で、こゝろざみやこ志す都へふりだ振出しの、うりあど瓜井戸のしゆくい宿へ急いだ。

が、そ其の間に、おな同じうりあど瓜井戸のはら原と云ふのがある。これ此なんたて縦によ四

りはつちやう、横は三里に餘る。

むら 村から松並木一つ越した、此の原の取着きに、式ばかりの建
 場がある。こゝに巢をくふ平吉と云ふ博奕仲間たのに頼んで、其の
 裕あはせと綿入わたれを一枚いちまいづゝ、帯おびを添そへて質入しちいれにして、小助こすけが手てに
 握にぎつた金子かねが……一步いちぶとしてある。尤も使もつとつかひをした、ならすの平へいが
 下駄げたどころか、足駄あしだを穿はいたに違ちがひない。

此この一步いちぶに、身みのかはを剥むかれたために、最惜いとしや、お秋あきは繼まは
 母はには手酷てひどき折檻せつかんを受うける、垣根かきねの外そとの樹きの下したで、晝ひる中なかに
 帯おびを解といたわ、と村中むらちうの是沙汰これぎたは、若い女わかをんなの堪たへ忍しのばれる恥はぢで
 はない。お秋あきは夜よとも分わかかず晝ひるとも知しらず朧おぼろ夜よに迷まよひ出いでて、
 あはれ十九いちじうを一期いちごとして、同國どうこく浦崎うらざきと云いふ所ところの入江いりえの闇やみに身み

を沈めて、蘆の刈根のうたかたに、其の黒髪を散らしたのである。

時に、一步の路用を整へて、平吉がおはむきに、最う七ツさがりだ、掘立小屋でも一晩泊んなねな兄哥、と云つてくれたのを、いや、瓜井戸の娼妓が待つて居らと、例の己が、でから見得を張つた。内心には、嫂お艶の事、又お秋の事、さすがに好い事をしたと思はないから、村近だけに足のうらが擦い。ために夕飯は、さうくやきぶなした、焼鮎で認めて、それから野原へ掛つたのが、彼これ夜の十時過になつた。

若草ながら曠野一面、渺々として果しなく、霞を分けてしろ／＼と、亥中の月は、さし上つたが、葉末を吹かるゝ我ば

かり、狐きつねの提ちやうちん灯みも見えないで、時とき々々、むら雲くものはらくくと掛かるやうに、處ところ々々、草くさの上うへを染そめるのは、野飼のがひの駒こまの影かげがさすのである。

小助こすけは前途ゆくてを見渡みわたして、此これから突張つっぱつて野のを越こして、瓜井戸うりんどの宿しゆくほひへ入ひつたが、十二時こゝのつを越こしたと成なつては、旅籠屋はたごやを起おこしても泊とめてはくれない。たしない路銀ろぎん、女郎屋ぢよらうやと云いふわけには行ゆかず、まゝよ、とこんな事ことは、さて馴なれたもので、根笹ねざさを分わけて、草くさをまくら枕まくらにころりと寝ねたが、如何いかにも良い月つき。

春はるの夜よながら冴さえるまで、影かげは草くさを透すくのである。其その明あかりが目を射さすので、笠かさを取とつて引被ひきかぶつて、足あしを踏伸ふみのばして、眠ねむりかける、とニヤゴと鳴ないた、直ぢきそれが、耳許みもとで、小笹こざさの根ね。

「や、念入りな處まで持つて來て棄てやあがつた。野猫は居た事のない原場だが。」

ニヤゴと又鳴く。耳についてうるさいから、シツ／＼などと遣つて、寝ながら兩手でばたくと追つたが、矢張聞える。ニヤゴ、ニヤゴと續様。

「いけ可煩え畜生ぢやねえか、畜生！」
と怒鳴つて、笠を拂つて、むつくりと半身起上つて、透かして見ると、何も居らぬ。其の癖、四邊にかくれるほどのな、葉の伸びた草の影もない。月は皎々として眞晝かと疑ふばかり、原は一面蒼海が凪ぎたる景色。

卜錨が一具据つたやうに、間十間ばかり隔てて、薄黒い影

を落して、草の中でくるくるとる車がある。はて、何時の間に、あんな處へ水車を掛けたらう、と熟と透かすと、何うやら絲を繰る車らしい。

白鷺がすうつと首を伸ばしたやうに、車のまはるに従うて眞白な絲の積るのが、まぎくくと見える。

何處かで、ヒイと泣き叫ぶうら若い女の聲。

お秋が納戸に居た姿を、猛然と思出すと、矢張り鳴留まぬ猫の其の聲が、豫ての馴染でよく知つた。お秋が撫擦つて、可愛がつた、黒、と云ふ猫の聲に寸分違はぬ。

「夢だ。」

と思ひながら、瓜井戸の野の眞中に、一人で頭から悚然とす

ると、するくと霞が伸びるやうに、形は見えないが、自分の居
 まはりに絡つて鳴く猫の居る方へ、招いて手繰られるやうに絲
 卷から絲を曳いたが、幅も、丈も、颯と一條伸擴がつて、
 肩を一捲、胴へ搦んで、

「わツ。」

と搔拂ふ手を、ぐるぐ捲きに、二捲卷いてぎりぐと咽
 喉を絞める、其の絞らるゝ苦しさに、うむ、と呻いて、脚を空ぎ
 まに仰反る、と、膏汗は身體を絞つて、颯と吹く風に目が覺
 めた。

草を枕が其のまゝで、早しらくと夜が白む。駒の鬣がさら／＼と、朝かつらに揺いで見える。

おそろ 恐しいよりも、夢ゆめと知しれて嬉うれしさが前さきに立たつた。暫しばらく時ばう茫ぜん然ぜん
 として居ゐた。が、膚はだぬ脱ぬぎに成なつて冷ひや汗あせをしつとり拭ふいた。其その
 手てぬぐひ拭むかを向むかう願はちまき卷まき、うんと緊しめて氣きを確しつかり乎かと持もち直なほして、す
 たくと歩あるき行だ出した。

——こんなのが、此この頃ごろ、のさくと都みやこへ入いり込こむ。

明治四十五年一月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

※表題は底本では、「一席話《いつせきばなし》」とルビがついています。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2011年8月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

一席話

泉鏡太郎

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>